

手賀沼通信(第304号)

Eメール: nittay@jcom.home.ne.jp
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai

http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/
http://tegatu2.web.fc2.com

新田良昭

今月は弟から届いたエッセイ2篇です。

特別寄稿

太田道灌と山吹の里伝説

新田自然

我が家から300メートルほどのところに「大庭城址公園」がある。太田道灌が築城したとされる標高50メートルほどの小山である。いまは桜の名所となっているが、礎石や空堀など、城であったことを示す遺構がある。たしかに道灌が造ったという記録はないが、藤沢市史では築城年代まで推測して道灌説を主張している。道灌築城のはっきりしている城、たとえば江戸城、河越城、岩槻城など、はっきりしているものと、そうでないものが存在しているのである。道灌にはそのような明確なものと不確かなものが混在している。

この山吹の里の伝説は、もっとも有名な不確か伝説である。

太田道灌は室町時代後期に活躍した武将・歌人で、関東地方では人気の高い人物である。道灌にまつわる不確かな伝説の多さは、室町時代という解りにくさが背景にあって、いまひとつ現代において盛り上がり欠けているように思われる。これは道灌が関東地方中心に活動した人物であったこと、吾妻鏡のような明確な記録が残されていないこと、戦国時代前であって小規模な戦が多かったこと、有名な女性がほとんど登場して来ないこと、などによるものではないかと思われる。

しかし多くの事実や伝説から、道灌にまつわる不都合な行為や事例が全くないところから、スケールの大きさ、多彩さ、劇的な生涯を送った英雄として人気があり、銅像や記念碑などに採りあげられている。「道灌」という名前を付けただけでも道灌山以下、道灌通り、道灌橋、道灌坂、道灌濠、公園など、建造物、記念碑、銅像などが関東各地に造られ、いくつかは昭和になっても作られている。

簡単に人物像に触れる。

永享4年(1432)鎌倉もしくは埼玉生越(おごせ)生まれ?

文明18年(1486)伊勢原にて謀殺54歳

扇が谷上杉家重臣(家宰)で主家興隆のため大きな働きをした。

幼時から神童と言われ、鎌倉建長寺で教育を受け、後に足利学校に学んだ?

戦の名人で、近代戦の嚆矢と言われる足軽戦法を生み出した。30戦して負けなし。

築城に秀で、江戸城ほか多くの城を築き、現在の東京の基礎を作り上げた。

優れた政治家として民の人気絶大。

和歌をよくした歌人、外に連歌、漢詩など文人としてもすぐれている。

宗教心にも暑く、開基、中興した社寺も多い。

下剋上の時代にあって、あくまで主家扇谷上杉家宰として、その隆盛に努めたが、その主君から誅殺されるという悲劇のヒーロー、でもある。

まさにスーパーヒーローである。中身からすれば義経をしのぐといってもいい。そのような道灌であるからこそ、江戸時代から明治にかけて人々の人気を集め、幾多の伝説や逸話、それに基づいた人物像ができ上り、それらが明治の教科書にも載せられたのだろう。だが、なぜか大河ドラマでは、これまで取り上げられていない。

前書きが長くなった。これもその伝説のひとつと思われるが、私のとても好きな物語が「山吹の里」伝説である。伝説は当時から広がっていたものではなく、突然江戸中期に現れ、有名な逸話となった。落語にも取り上げられ(いまでも語られている)、戦前の教科書にも載せられ、いわば常識化されていったが、誠によくできた話である。それについて書いてみたい。

この逸話は「常山紀談(元文2年 - 1739)」にあ

る。本文は以下の通り。

「太田左衛門大夫持資は、上杉定正の長臣なり、鷹狩に出て雨に逢い、ある小屋に入りて蓑を借らんとし、若き女の何とも物を言わずして、山吹の枝一矢折りて出しければ、『花を求むるにあらず』と怒りて帰りしに、これを聞きし人の『それは、七重八重花は咲けども山吹の実のひとつだになきぞ悲しき、という古歌のこころなるべし』といふ。持資驚きてそれより歌に心をよせり」

この古歌とは「後拾遺和歌集」兼明親王の詠んだ和歌である。

この逸話は江戸庶民の愛好されることとなり、落語「道灌」でも語られ、漢詩も詠まれ、明治になって国定教科書にも掲載された。

漢詩 太田道灌借蓑図 作者不明

孤鞍衝雨叩茅茨 少女為遺花一枝 (孤鞍雨を衝いて茅茨を叩く 少女為に遺る花一枝)
少女不言花不語 英雄心緒乱如糸 (少女言わず花語らず 英雄の心緒乱れて糸の如し)

鷹狩りに出た太田道灌は部下とはぐれ、折からの雨の中に一軒の草ぶきの家を見つけ、蓑を所望した。出てきた少女は無言のまま引っ込んで、うやうやしく山吹の花一枝を差し出した。道灌は少女の意図を解しかね混乱した。別に花がほしいわけではない、と。

城に戻った道灌はそのことを話した、家人の一人が進み出て、

「後拾遺集の中に兼明親王が詠まれた歌に

『七重八重花は咲けども山吹の実のひとつだになきぞ悲しき』、

という歌があります」。

「我が家は貧しいもので差し上げる『蓑』ひとつさえございません、というものでございませう」と話した。

片田舎の貧しい家に、このような教養と機知を備えた少女がいたとは、道灌は深く恥じ、深く感銘を受け、その後歌道に精進した。

明治26年に編集された文部省の教科書「高等科用・帝国読本巻之一」「第三課・太田道灌歌道に志す・常山紀談」にはこのような前文がある。「かかる大都も、今より四〇〇年の昔にありては、武蔵野の原なりき、この原きりひらきて、今の東京

の初をなしたるは、そもそも誰ぞ、太田道灌なり」と記され、本文には「山吹の里の話」「疋男海辺の話」「利根川の話」が原文で記載されている。挿絵もあって、少女が山吹の枝を差し出している絵と、濡れて帰る道灌一行の絵が添えられている。

教師用指導書の冒頭には「此レヲノ事ハ、国民タル者ノ当ニ知ルベキトコロニシテ、一ツモカクベカラザルモノナレバナリ」

後の二話は省略するが、いずれも歌道に長ずる道灌が、戦の場において古歌を引用し、戦いを有利に進めた事例が所載されている。

これが山吹伝説の概要であるが、この話が広く世にはびこるにしたがい、それが発展して、「その里は此处である」と名乗り出たところが、東京豊島区高田、荒川区町屋、神奈川横浜市六浦、埼玉県越生など数箇所あって、話によっては、後日談まで用意されている。高田では、いたく感動した道灌は、後にその少女を江戸城に招き、歌人として重用した、名前は「紅血」と云い、道灌が死んだあとは尼となって庵を建て吊ったと続き、おまけにその碑(墓碑)まである。ここまで来ると、といささか蛇足感も生じるが、面白い。

鎌倉駅からほど近いところに、北条政子、実朝の墓所のある寿福寺があり、隣接して英勝寺がある。道灌の屋敷跡と聴き、先日訪ねたが、あいにくの休館日であったため入ることはかなわなかったが、門の脇に「太田道灌邸跡」とあり、

「孤鞍雨ヲ衝イテ茅茨ヲ叩ク少女為ニ遺ル一枝詩趣アル逸話ハ道灌ガ往年猶此ニ在リシ日ニオイテ演ゼラリシ所ノモノナリ」とこれも間違いなく話に乗っている。

さらにこの話に異説をはさむ向きもあって話の枝葉を広げている。優れた歌人であった父道真から歌道について学ばなかったはずがない、とすれば「後拾遺集」の古歌を知らないはずがない、というのである。さらに山吹を差し出したのは少女ではなく老婆だったという説、ほかにもごちゃごちゃ。まあこんな話は、話は話として、話に悪乗りして楽しんでいいのだらう。「そこまでやるか」こんな話が実に楽しい。

落語「道灌」の噺の筋は、ご隠居から山吹の里の話聞いた八五郎はすっかり感心して、よく傘

を借りに来る熊に、この話で断ってみたいと思いつく。折よく雨が降り出して熊がやって来たが、雨具でなく提灯を貸せという。困った八五郎は「傘を貸せと云えば提灯を貸してやる」という始末、落ちは「角（歌道）が暗いので提灯を借りに来た」というのである。興味のある向きはユーチューブでお聴きください。

先日、ついでもあって、越生(おごせ)という道灌に最も執着している埼玉の町へ行って来た。バスと電車三つも乗り継いで約3時間、八高線は単線、ほとんどが無人駅(これはまったく余談だがトイレはほとんど和式) 普段は山あいの静かな町であるが、「関東三大梅林」として有名な町は、梅のシーズンとて多くの観光客でにぎわっていた。「山吹の里歴史公園」は駅から歩いて約10分、越辺川を渡った山裾にあった。

「山吹の里」と彫りこんだ石塔があって、50メートルくらいのなだらかな山を背負って、小さい池と草葺きの小屋がある。流れはないのに、なぜか水車がついている。山吹はそこここに植えこんであるが、花の季節でないため、意識して探さないとわからない。山の上に展望台があるらしく、雑木に覆われた登り道がつけられているが、当日の歩きで足がいうことを訊かなかった。園内には一組の男女がいるのみ。

小屋から少し離れて、往時を偲んでみようとして、目を細めて時代を遡ろうとした。私が想像していたのは雑木や芒が生い茂る荒れ野をイメージしていたのだが、それは無理であった。車の往来があり、その音も気になる。少女は臉の中にも現れるべくもなかった。

あまり収穫はなかったが、来てよかったと思っていた。道灌はこんなところにも足しげく通い、わが藤沢にも、東京にも、さらには関東一円をわが庭のように駆け巡ったのだ、そう思うと何とはなしに、ふと道灌とすれ違った気持ちが出て、心が満たされていたのだ。

電車の時間も気になった、逃すとあと1時間はない。駅には売店もないので、切り上げることにした。

山吹の里はどこでもよい、わが道灌さんはそれぞれの心であればいいのだ。思えばこの半月、道灌さんと一緒にいろんなところをめぐり、戦い、歌を詠み、月を眺め、城に登り、少女に出会った。

実話かどうかなんて、そんなことはどうでもよい。それを信じる江戸の人々の心根がいいと思った。

それで、大河ドラマであるが、私の大胆な予測では2年以内、ひよっとすれば来年、道灌さんをモチーフとした大河ドラマが実現するのである。山吹の少女は語り部となって、自らも成長し、ドラマの進行を見守るのだ。

さて最後の余談だが、私の町の大庭城であるが、藤沢市の主張するごとく、道灌が築城したと考えるのが一番妥当だろう。歴史書に取り上げられなかったのは、城の規模が小さかったことによると想像する。江戸城の規模からすれば十分の一以下で、使い勝手の良い砦だったのではないか。

藤沢市も何がなんでも道灌築城説を言うのであれば、それらしき宣伝をすればよい。たとえばであるが、公園のド真中の巨大な桜の樹があるが、私ならこの樹を「道灌桜」と呼ぶことにする。看板を立てればいいのである、そこで催しものなどを作って、数年も経てば少なくとも道灌と城が深い関係にあることが広がるだろう。江戸の人達は墓や石柱などシレッとして建てているではないか。

特別寄稿

少年の世界と戦争直後の歌

新田自然

国民学校に入学した年の8月、戦争が終わった。幼かった私にとって、歌はまだ身近ではなかった。軍歌を歌うには幼過ぎるし、戦況がひっ迫している時であったため、世間一般が歌を歌う環境になかったのであろう。

戦争が終わっても、世間が落ち着くまで、歌がすぐに世に出ることはなかった。この年に発表されたのは、敗戦を受け入れる前の数曲で、いずれも軍歌や軍国調の歌であった。

戦後の歌として記憶しているものに「お山の杉の子」がある。「昔 昔 その昔 椎の木ばやしのすぐそばに〜」、この歌は嫌いな歌ではなかったが、行進曲のようでもあり、歌詞からしても戦中を引きずっており、新しい時代の歌ではなかった。

昭和21年になり、「リンゴの歌」「東京の花売り娘」「かえり船」などがヒットしたようであるが、私にはそれが新しい時代の歌として受け入れるには至らなかった。特に「リンゴの歌」は戦後歌謡のヒット曲第1号として紹介されるが、戦後の曲

として受け入れるには、私がまだ幼かったというしかない。

新しい戦後教育が始まり、新制小学校生として進級するにしたがい、少しずつ世界が広がって行った。そして新しい時代の歌として共鳴するに至ったのが、昭和22年の「山小舎の灯」であった。聞いたのは中学校の講堂であった。催し物があると、学校の講堂は使われ、人があふれた。町には公民館などの施設もなく、娯楽のない日々の中で、人々は催し物に渴望し、なにかあると講堂はいつもいっぱいになった。それはなにかの演劇会で、挿入歌であったかもしれない。

山小屋の灯(詞曲 米山正夫 唄 近江敏郎)

黄昏の灯は ほのかに点りて
なつかしき山小舎は 麓の小径よ
思い出の窓に寄り 君を偲べば
風は過ぎし日の 歌をばささやくを

この歌を聞いた時、別世界に迷い込んだような、不思議な新鮮さを感じた。新しい時代が来たと実感したのだ。

歌詞にも新鮮さを感じた、「黄昏」「灯」「山小舎」「白馬・穂高」...など、まだ学校で教えてくれない言葉との出会いもあったのかもしれない。なにか、都会の人の匂いを感じた。満員の講堂のあのシーンをはっきりと思い出すのは、私の成長が新しい時代を受け入れ、これまでの小社会から一歩踏み出したことなのだろう。この歌はNHK「ラジオ歌謡」の歌として発表されたと聞く。ラジオ歌謡の歌は他にもいくつか記憶している。この年に発表された歌に「みかんの花咲く丘」があり、今でもくちずさむ好ましい歌であるが、新しいものとして受け入れたものではなかった。

この頃になって、わが街にも外地からの引揚げ者が目立つようになってきた。学校にも、新しい子供たちが入学してきた。その子たちに、これまでの町と違う匂いや文化を感じた。昭和22年になって「鐘の鳴る丘」というラジオドラマが始まった。戦災孤児という存在を知った。「とんがり帽子」という挿入歌が全国に広がって行った。「緑の丘の赤い屋根 とんがり帽子の時計台 鐘がなりますキンコンカン〜」。この歌は頭の中に沁み込んでいて、私の朝のウォーク時、拍子をとる行進曲として、口をついて出て来てくる。

「パンパン」という言葉、もう死語となってしまっただけで、広辞苑に「第二次大戦後、米兵を相手にした娼婦」とある。その頃、まだ性に目覚めていなかったが、その前触れとして、大変興味を抱くようになっていた。ガキ大将や年長者の話に、なにやら怪しげな話として、興奮して聞き耳を立てた。松山にそのような女性がいたかどうかは知らない。その頃、彼女たちの悲しみと怒りを込めた曲が出た。「星の流れに」、新聞に投書された記事から生まれたものだという。22歳の引揚女性の転落の過程が書かれてあったそう。「こんな女に誰がした」そのフレーズが少年の心にぐさりと刺さった。

星の流れに (詞 清水みのる 曲 利根一郎 唄 菊池章子)

星の流れに 身を占って
何処をめぐらの 今日宿
荒む心で いるのじゃないが
なけて涙も 涸れ果てた
こんな女に誰がした

戦後も数年経つと、はじけるように歌が出て来た。私の世界も拡大し、町から外に、都会に、アメリカに、向けられていった。多くはラジオ、映画、書物からであったが、好奇心はまだ見ぬ世界へ向けられていった。この年の歌に「港が見える丘」というのがあった。なんとなく横浜を想像した。東京も横浜もまだ外国であった。

流行歌のジャンルは、このあとジャズなどの西洋音楽が入り込み、さまざまに分枝され発展し、あるいは廃れ、今日に至るが、連綿と続いて絶えることはない。

私の歌の世界の拡大は、この後大学に入ることになって、うたごえ運動に拡大し、そこで出会った美しい歌に進んでゆく。住まいも東京になってゆく。

紙数がないので、終戦時の、私が幼児から少年に至る、一時期に受け止めた感興に留めるが、書いていて実に懐かしい。それは歌が懐かしいのではなく、自分の若かった頃が懐かしいのだ。帰り道を失った少年の日の戸惑いが眼前に広がっている。

「シェーン、カムバック！」